

四日市市の沿革

四日市市は三重県の北部に位置し、西は鈴鹿山系、東は伊勢湾に面した温暖な地域である。すでに旧石器時代から人々が住み、縄文から弥生時代の遺跡も数多い。市内各所に古墳が築かれ、なかでも志氏神社古墳は市内唯一の前方後円墳として知られる。日本武尊伝説や壬申の乱等は、四日市地域の古代の姿を垣間見るものである。8～10世紀には智積廃寺や上昌寺の釈迦如来座像など四日市地域への仏教文化の広がりが認められ、また、多度神宮寺伽藍縁起井資財帳によれば条里が整備されていた様子がうかがえる。平安から鎌倉時代には伊勢平氏の活躍の舞台であった。それだけに鎌倉、南北朝、室町時代には時の指導者がその被官を伊勢国に配置した。

1473年の外宮庁宣に「四ヶ市場浦」の地名が出てくる。この頃から定期市「四日市」が立っていたことがうかがえる。江戸時代、市場町・湊町の四日市に「宿場町」「陣屋・代官所の町」が加わり、北勢の行政・商業の中心地として知られるようになる。幕末から明治にかけ、菜種油や肥料の生産や取り引きの盛んな町として栄え、四日市港の修築を機に、生糸、紡績を中心とした繊維工場へ、さらに、機械工業や化学工業の推進が相次ぎ、日本の近代工業化への歩みを模したかのような形で四日市地域が商工業の都市に進展した。明治30年に市政を施行し、昭和5年に塩浜、海蔵の両村を合併して以来、昭和32年まで周辺の町村を併合、現在の市域となった。昭和30年代以降、石油化学工場等の推進は、大気汚染等の公害をもたらしたが、今では環境浄化に努力し、自然との調和を目指した町づくりに邁進している。

消 防 概 要

本市消防体制は、消防本部に総務課・消防救急課・予防保安課・防災教育センターを設置し、市街地に中消防署・北消防署・南消防署の3署を置くとともに、海上・沿岸地域に中消防署港分署を、市西部に西分署、北西救急分駐所及び西南救急分駐所を、受託地域の三重郡朝日町に北消防署朝日川越分署をそれぞれ配置して、有事即応体制の確立を図っている。

これに対応する消防力として、消防職員292名、消防車両等70台、消防艇1隻のほか、本市各地区に消防分団23分団、団員412名、車両23台が配備されている。

一方、大規模な災害に対応するため、市民の参加による自主防災組織の推進を図り、市民と一体になった総合防災体制の確立をめざしている。